

俳句教室

学園祭展示作品

両の手に包む湯飲みや寒の朝

長谷川 洋子

冬の朝、冷たい手で温かい湯飲み茶碗を思わず包み込んだことを詠みました。

ふはと踏む松の根方や春時雨

森戸 謡

三月に小石川植物園に吟行に行きました。小雨が降ったりやんだりして、深く積った松の落ち葉をしつとりと濡らしていました。遊歩道からふと松の木の下へ足を踏み入れた時のあのふわっとした感触を今も忘れません。

風吹きて濠一面の花筏

西野 信

千鳥ヶ淵の沢山の桜の花びらが水に浮かんでいる様子を詠みました。

川の面へ雪崩るるごとく花花花

高間 恭子

都電面影橋駅から早稲田駅間の神田川沿いの桜。川岸から川面へ満開の花が雪崩落ちるように見事に咲いていました。

日本丸立夏の海に帆を張れり

松坂 麗子

桜木町駅を降りると日本丸が帆を降ろしていました。訓練生を乗せて帆を張り、大海原へ出て行く様を詠みました。

緑たつ即位参賀に人溢る

藤田 笙

令和を迎え新天皇に人々が手を振る映像から詠みました。

即位祝ふごと輝けり樟若葉

山崎 藤子

即位の日は好天に恵まれ、テレビに映る樟若葉の輝きは特別で、即位を本当に祝っているようでした。

すずかけの花小道を風の吹き渡る

田澤 宮

忘れ得ぬ出来事の後、日比谷公園を歩いている時に見た鈴懸の木。その清々しさが、何十年も経った今も心に残っています。

額紫陽花好みしははの記念樹に 浅賀 いく子

毎年この季節に母と一緒に歩いていると、「私は額紫陽花の方が好きだわ。」と言っていました。その時の自分はその良さがわかりませんでした。

梅雨明けやスカイツリーの輝ける 安部 洋輝

梅雨明けに浅草を歩いている時、ビルの谷間から忽然とスカイツリーが現れました。白く輝くその姿に目を奪われました。

逆上がり素足の先に母の笑み

小林 かづ

買い物の途中の公園で見かけた親子の光景です。

鴨川や遊び足りずに残る鴨

田中 京

麗らかな春の日、鴨川の鴨たちが楽しそうに川面で遊んでいるのを見て、北へ帰らなくていいのかしらと心が和みました。

夏蝶のたはむる水車深大寺

塩崎 みつえ

深大寺のお蕎麦屋さんで美味しいお蕎麦を食べている時、水車の周りを遊んでいるように飛ぶ蝶を見てとても安らぎを覚えました。

月見草さらりと生きて逝きし人

熊崎 知恵子

最近死に直面する事が多くなり、想う事、考えさせられる事が多くなりました。

祖父老いて軋み小さく籐寝椅子

横須賀 智

母方の祖父は厳しい人だった。孫の私達を決して甘やかさなかった。祖父のお気に入りには籐の寝椅子で、夏は団扇片手に縁側で涼んでいた。籐で出来た椅子はぎしぎしと音を立てて軋んだ。その音もやがて祖父が老いるにつれて小さくなっていった。白い縮みのシャツとステテコ姿の祖父が今も目に浮かぶ。

炎天や風通る道猫に聞け

斎藤 文

猫は暑さに弱いと言う。その猫がお昼寝している所は高い所でも狭い所でも風通しの良い所だそう。な。

山百合のかをりゆかしき帰郷かな

岡村まさよ

三十年ぶりの田舎の風景。山あり川ありの光景に我を忘れました。一週間夢のようでした。

庭花火一人遅れて始まらず

栗原 あきこ

お盆で実家に帰りました。「さあ花火をしよう」と言つてバケツに水を張り外に出ました。一番年下の私の娘が一人現れずなかなか始められません。

飼い猫の鳴き声長し残暑かな

長澤 とうこ

残暑が長いので飼い猫の鳴き声も心なしか長く感じられました。

稲架襖途切れて展く日本海

新井 朋子

八月七日、新潟地方は稲架襖が点々と見られました。また、北陸自動車道から見た日本海は見事でした。この景色をどうにか句にならないかと考えて出来た句です。

もう風と遊べぬほどに蓮枯るる

篠寄 恒

夏にはあんなに風と楽しんでいた大きな蓮の葉も、美しい花も、今ではこんなに枯れ果ててしまつた。不忍池にて。

猫逝きて炬燵はひろき荒野なり

西村 悦

十九年生活を共にした猫が亡くなり、冬は炬燵に長々と寝て邪魔だったのに、居なくなった淋しさを詠みました。